「部落出身」との結婚忌避態度の説明要因について

野口道彦

一、はじめに

被差別部落（以下「部落」と略称する）に対する差別意識を解明しようとするとき、大きく分けて二つの課題がある。一つは差別意識の内部構造の解明であり、もう一つは差別意識の存立構造の解明である。本稿では後者、すなわち「部落」に対する差別意識がどのような要因によって支えられ、維持されているのかを、一九七七年の大学生の意識調査のデータをもとに若干の考察を加えたものである。[1]ここでは、差別意識として「部落出身者」との結婚忌避の態度をとりあげる。これが部落問題とは直接関係しない意識によって、どの程度説明されるのか、説明されるとすれば、どのような要因が結婚忌避態度を生み出すのに大きな影響をもっているのかを検討する。

データは少し古く、発表の時期を逸した感がないでもない。また質問項目に反省すべき点が多々見られ、今更の発表がためらわれるのであるが、差別意識の存立基盤を実証的に論じたものがあまり見うけられないので、[2]今後の研究のためのたたき台にでもなればと思いつつ、本稿をまとめてみた。

二、差別意識と結婚忌避態度

「部落」に対する意識総体のうち、ある特定の質をもつものが、差別意識である。では、どのような性質をもつも

のを差別意識ととらえるのか。差し当たり、次の五つの要素をあげることができる。(1)過度の一般化を行なうことによって、「部落」に仮想上の差異を付与するか、もしくは事実上の差異をことさら意味をもつものとして中心的に位置づける。[3] (2)このように認知された差異をネガティブに意味付ける。例えば、「部落」を負のイメージでとらえるとか、「部落」を見下げるとかの態度などがある。[4] (3)このような差異性を媒介として、「部落」と「私達の世界」とは異質なものとして認識し、(4)「部落」に対して合理的・理性的にではなく、非合理的、感情的に反応し、[5] (5)「部落」を遠ざけるか、もしくは忌避する方向性をもつ意識である。[6]

差別意識の典型的タイプは、これら五つの要素を合わせ持つものであるが、現実の形態は各要素の強弱を異にしつつ、差別意識と判別しがたいものから、典型的なものまで、さまざまなものがあることはいうまでもない。

「部落出身者」との結婚忌避の態度は、(5)の社会的距離の要素を結婚という仮想状況で測定したものであり、(1)から(4)の要素を直接含むものではない。その点では、差別意識の一部分しかとらえていないと言える。「部落」に対する差別意識を本格的に分析しようとすれば上記の五つの要素をとらえる測定尺度を工夫する必要があるが、単一の質問項目で差別意識をとらえるのなら、今日の意識状況からみて、「部落出身者」との結婚の忌避態度の有無で測定しても大きな間違いはない。

ただ注意すべきことは、これが差別意識以外の要素も測定している可能性があることだ。結婚という状況を設定することで、日本の結婚や家族制度からくる別の要素が混入する。例えば、「家族や周囲の皆から祝福される結婚が望ましい」という意見を強く支持する者は、かりに差別意識の上記の(1)から(5)までの要素を全くもっていないとしても、親や周囲の者が「部落出身者」との結婚に強く反対すれば、結婚を断念することが十分予想される。こうした点を考えて、家族と世間の差別意識の有無と結婚忌避の組み合わせのパターンを表1のように作ると、結婚忌避は4つの場合がある。〔7〕の「反発忌避型」は、家族や世間の反対のためではなく、対象者本人の差別意識が忌避の態度を生み出したものであるが、〔3〕や〔5〕の忌避の態度は、対象者の差別意識と家族もしくは世間への同調性との複合の結果生み出されたものといえる。それに対して〔1〕の「同調忌避型」は、差別意識がなくても家族や世間に同調的であれば、それだけで生まれてくる。

表1．家族・世間・本人の態度パターン

家族の態度	世間の態度	本人の結婚への態度	パターン	
−	−	−	1	同調忌避型
		+	2	反発結婚型
−	+	−	3	家族同調忌避型
		+	4	家族反発結婚型
+	−	−	5	世間同調忌避型
		+	6	世間反発結婚型
+	+	−	7	反発忌避型
		+	8	同調結婚型

「家族の世間の態度」の<−>は、差別的態度<+>は非差別的態度を示し、「本人の結婚への態度」の<−>は結婚忌避の態度<+>は結婚遂行の態度を示す。

しかしこのような場合でも、差別意識がないと断言できるだろうか。これも差別意識の概念規定のいかんによるが、他者の差別行為を容認し、同調する態度も差別意識に含めることもできよう。[7] そのほうが、現実の「部落」に対する意識をもれなく捉えることができるだろう。そうすると、上記の差別意識の五つの要素に加えて、(6)他者の差別行為を許容する傾向をもう一つ付け加える必要があろう。

このように、差別意識の概念を拡張しても、結婚忌避の態度は差別意識以外のなにかを含んでいる可能性には留意しておこう。

三、説明要因・同調性

こうしたことから、まず「部落出身者」との結婚忌避を説明する要因として家族や世間への同調性が考えられる。「家族への同調性」は、この調査では直接測定していない。伝統的家族観への支持で間接的にとらえた。「家意識」、「同別居観」、「姓選択」と「理想の家族」の四つの側面から捉えた。いずれも伝統的家族を支持するものほど、家族への同調性は高く、またその伝統的価値観より「部落」に対して差別的であると予想される。「家意識」は、自己本位的配偶者選択か家族本位的配偶者選択かでとらえ、「同別居観」は親は子と別居すべきかそれともどの子と同居すべきかで聞き、「姓選択」は結婚すれば夫婦いずれの姓を名乗るべきかで、また「理想の家族」は夫婦の伝統的な役割関係への支持の有無でとらえた。（補注、質問A・B・C・D）

また、「世間への同調性」は世間の目を気にするかどうかと、世間との付き合いを重視するかどうかの二つの質問を組み合わせて測定した。（補注、質問E・F）世間一般では「部落」に対して差別的であるとすれば、「世間への同調性」が高いほど「部落出身者」との結婚に忌避的であ

ると仮説をたてた。

四、説明要因・権威主義

周知のようにT・W・アドルノたちは、反ユダヤ主義を受け入れやすいパースナリティとして権威主義を措定し、これを測定するFスケールを考案した。[8] アドルノ達は、直接ユダヤ問題や差別問題に触れていない質問項目で間接的に反ユダヤ主義的傾向を測定できるようなものにしたいという意図をも持っていた。アドルノの理論的枠組みを認めるならば、歴史的、社会的背景は異なるとしても、反ユダヤ主義と同様に「部落」に対する差別意識を支える者として、権威主義的な価値観を想定することができるだろう。また、部落問題に直接言及せずに、「部落」に対する差別意識を測定するようなスケールが作れるのなら、実践的にもこれほど便利なものはないだろう。それにもかかわらず、このような権威主義的パースナリティと部落差別意識との関係を検討した研究はないようだ。そこで、権威主義的パースナリティが部落問題においても関係をもつのか調べることにした。だが、アドルノたちのFスケールをそのまま用いることはできない。一つに歴史的・文化的・社会的背景の違いから、二つに質問項目の多さ、もっとも洗練されたフォームでも30項目にのぼる、という難点がある。そこでアドルノたちが、権威主義的パースナリティの構成要素としてあげた(1)因習主義、(2)権威主義的従属、(3)権威主義的攻撃、(4)反内省性、(5)迷信とステロタイプ、(6)権力とタフネス、(7)破壊性とシニシズム、(8)投射性、(9)性的関心、の要素を考慮しつつ九つの質問項目を構成した（補注、質問G）。これらは上記の九つの要素に一対一に対応するものではない。

これらの九つの項目から権威主義的スコア（Fスコア）を算出した。得点の与えかたは、それぞれの質問に「全く賛成」に1点、「やや賛成」に2点、「どちらともいえない」に3点、「やや反対」に4点、「全く反対」に5点をあたえ、単純加算した。したがって得点は9点から45点の間に収まることになるが、実際には18点から45点の間に分布した。対象者を得点順に並べ、ほぼ3分の1ずつのグループに分けたところ、Fスコアの18～27点が、権威主義の高いグループ、28～32点が中グループ、33～45点が低いグループとなった。このグループ分けしたものを以下の分布で用いる。これと各項目との相関は、表2の通りであり、まずまずの相関を示し、権威主義を測定する項目として妥当なものであることがわかる。

表2　権威主義的スコアと各項目との相関

（ピアソンの相関係数）

A 1	.427
A 2	.532
A 3	.509
A 4	.558
A 5	.471
A 6	.496
A 7	.472
A 8	.470
A 9	.492

五、説明要因・地位意識

結婚差別のいくつかの事例は、差別者が社会的地位に強い関心をもっており、それが「部落出身者」を忌避する行動をとらせていることを示している。例えば、「部落出身者」と交際する甥に叔母は次のように言っている。

「おばちゃんの知っている和田山の多くの人は皆、『お兄さんはえらい人になっておられますね』と言って下さり、おばちゃんは喜んでおり、又りっぱな兄をもったことを有難いことだと思っています。（中略）あの人は貴方でも同じ境遇の人が沢山いて、それぞれに幸福がつかめるのです。全国に多くの人がいるのですから、どんなお金持ちの人もおられます。貴方は両親をそんなに苦しめないで下さい。お父さんも折角今日まで苦労して作ってられた社会的信用も、地位も名誉も一瞬になくなります。」[9]

この事例は、社会的地位の喪失への恐れが「部落出身者」との親密な関係の形成を忌避する行為を取らせていることを例証している。

アメリカにおいても「地位関心」とマイノリティー集団への偏見とがむすびついていることが明らかにされている。W・カウフマンは「地位関心」を、地位のシンボルやより高い地位の獲得に価値を置くことと概念規定し、(1)野心、(2)良き人々と知り合うことへの関心、(3)良好な住宅地に住むことへの関心、(4)品行方正な組織に加入することへの関心、(5)適切な社会的礼儀を知ることへの関心、などから構成される「地位関心」尺度を使い、これが「権威主義」や「反ユダヤ主義」[10]と強い相関を示していることを実証した。また、H・M・ブレロックはカウフマンの「地位関心」概念の下位概念として「地位意識」を使い、「地位が異なれば高い地位の者は相手を避け、低い地位のものは相手を敬服すべきだという意見を含む態度である」と概念

規定し、「地位意識」の強い者は、一般的な意味で社会的に低く評価されているマイノリティ集団との対等な付き合いを避けるとし、忌避行動と「地位意識」との関係を「地位喪失」（低い地位の者と対等な付き合いをすることによって地域社会における地位の下落を招くこと）という状況変数を媒介することで説明している。[11] ブレロックはこれらの関係をさまざまな変数と組み合わせて明示的な10組のいくつかの仮説に整理している。そこから導き出されるのは地域社会の偏見が強いほど、地位喪失が大きく、地位喪失が大きほど、地位意識は忌避行動を生み出すという予測である。

さきの事例をこれらの概念を使って説明すると次のようになる。(1)叔母は「部落」に対する根強い差別意識が、和田山という地域社会に存在すると認知している（事実かどうかは別として）。(2)そのため「部落出身者」との親密な付き合いが、甥の父（叔母の兄）の地位の下落を招くという不安感を強く抱いている（甥自身は学生であるので彼の社会的地位は無視されている）。(3)また叔母は兄の出世に同一化するほどに「地位意識」は強い。(4)その結果、甥に忌避行動をとるよう説得する行為が生み出された。

このような解釈の中で使った概念は厳密にはブレロックの概念とは少しずれている。彼の場合は、地位喪失の程度は、状況変数として、すなわち客観的に測定される事実として、把握されているのに対して、この場合は主観的な意識として、すなわちそれが当該の地域社会の事実であるかは別として、対象者（ここでは叔母）によって認知されたものとしてとらえている。このような場合、地位喪失への不安を強く抱くか否かは、対象者の「地位意識」を含めて意識のありかたと無関係ではない。そう考えるならば社会的地位や社会の序列構造そのものへの意味付けのしかたを把握する必要がある。そこでカウフマンの「地位関心」に沿って、ブレロックの「地位意識」よりさらに包括的な地位に関連するさまざまな意識を「地位関心」とし、これを(1)社会の序列構造を肯定的に評価し、(2)そのような序列構造の中で自己の地位の上昇を目標にし、(3)相対的に低位にあるものをネガティブに評価し、(4)自己の地位の下落を招くような行動を避けようとする意識と概念規定しておこう。

この調査では「地位関心」を簡単に次の二つの質問の組み合わせにより構成した。カウフマンの概念の中心的位置を占める「野心」に注目し、人生の目標として仕事の上で成功し、人々から尊敬されることを重視するか否か（補注、質問H）とライフ・スタイルとして、より高い地位を求める行きかたとか、のんびりとマイウェイをを楽しむ生き方を選ぶか否か（補注、質問I）の二つを組み合わせて

四つの類型を作った。「地位関心」の強いのは、尊敬・成功を重視しかつ上昇指向のタイプであり、その対極は尊敬・成功を求めず、マイ・ウェイを楽しむタイプである。他の二つは中間的なタイプである。

六、説明要因・能力主義

今一つ、「地位関心」を補強する要因として「能力主義」をとりあげる。この背後仮説は以上の説明から明らかなように、能力主義的のものほど「部落」に差別的であるという予想である。これも二つの質問からなる。一つは能力別学級編成を肯定するか否か（補注、質問J）であり、もう一つは貧しさを本人の努力や責任によるものととらえるか否か（補注、質問K）である。能力主義は、地位の付与・獲得の原理をその地位にふさわしい能力の有無に求め、生得的属性に求めないものである。この純粋形態を規定した場合、「部落」という生得的属性によって地位の付与・獲得の機会を制限することは、能力主義原理に反するものである。しかしながら現実の過程では、地位は不平等な資源の配分を伴ない、逆に能力獲得の条件をも不均質にするため、能力主義が不平等な地位の固定化ないしは世襲化に転化する場合が多い。ことに部落問題の場合、差別（機会均等の制限）とその結果現象（生活実態に現われた低位性）とが深く結び付いている。「部落」への差別的見方は、この結果現象としてではなく「部落」の「本来的な」属性と意味付けする。そのため、能力主義の肯定は必ずしも部落差別の否定につながるものではなく、逆に部落差別（「部落出身者」の能力獲得の際の不平等な諸条件）の容認につながる可能性が高い。

七、その他の説明要因

社会や自己の生活に対する満足度は、差別意識に影響を与えることは十分予想される。そこで、「社会全体に対して」と「あなた自身の生活全般について」の2つについて質問し（補注、質問L）、それを組み合わせて「社会・生活ともに満足」、「社会に不満、生活に満足」、「社会に満足、生活に不満」、「社会・生活ともに不満」の4つのパターンを構成した。

また政治参加態度については、補注、質問Mによってとらえた。同和教育の効果をみるために、高校の同和教育の頻度（補注・質問N）と部落問題の学習体験をとりあげた。学習体験は「親しい『部落』の人から、いろいろ話を聞いた」体験（以下「ひと体験」と省略）の有無と読書体

験の有無（補注、質問O）とを組み合わせた。

八、クロス集計による分析

「部落出身者」との結婚忌避の態度は、次の質問文でとらえた。「あなた自身、将来結婚相手の人が『部落出身』であるとわかった場合、どうしますか」。回答は「その人がよい人でも結婚しないと思う」99人、19・0％、「その人がよい人なら結婚すると思う」196人、37・7％、「わからない」225人、43・3％であった。「わからない」と回答したものに、重ねて「その場合に、家族や親戚が猛烈に反対すればどうしますか」と聞き、それに対して「結婚をあきらめる」と回答したものは49人であった。この49人をさきの99人に加えて、「結婚しない」グループ148人と「結婚する」グループ196人、合計344人を分析の対象とし、中間グループは分析から除外した。

まず各要因と結婚忌避態度との関係をみてみよう。表3は、各要因のカテゴリー別に、結婚忌避態度を表明する者の割合を示したものである。対象者全体の43％が結婚忌避態度をとるから、これより大幅に上下する要因ほど、結婚忌避態度と関連している。例えば、「権威主義」の「良い」グループでは、「結婚忌避態度」をとるものが67％を占め、逆に「低い」グループでは20％であるから、「権威主義」と「結婚忌避」とが強く結びついていることがわかる。

それぞれの要因と「結婚忌避」とが関連しているかをx^2検定で確かめると、表右端に示したように、「高校の同和教育」と「同別居観」の2つをのぞいて、5％以下の危険率で有意差が認められた。以上の結果をまとめてみると

(1) 権威主義的なものほど
(2) 地位関心の高いものほど
(3) 能力主義的なものほど
(4) 伝統的家族観をもつものほど
(5) 世間に同調的なものほど
(6) 満足度の高いものほど
(7) 政治的参加は「無駄」とするものほど
(8) 同和教育や部落問題の学習体験をもたないほど
(9) 男性より女性ほど

「部落出身者」との結婚を忌避する傾向にある。このように、ほぼ予想された結果が出た。

しかし、中には意外な結果もでている。「学習体験」の「ひと体験も読書体験もともにあるもの」では「結婚忌避」がさすがに18・8％と低く、他方「ともになし」は52・8％と高いのであるが、「ひと体験はあるが、読書体験

表3 カテゴリー別結婚忌避の割合

アイテム	カテゴリー	結婚忌避の割合	サンプル数	x^2検定危険率
権威主義	高い	67.0%	106	0.0000
権威主義	中	43.2	125	
権威主義	低い	20.4	113	
地位関心	尊敬・上昇指向	62.1	66	0.0000
地位関心	上昇指向のみ	45.9	37	
地位関心	尊敬指向のみ	54.7	95	
地位関心	非能力主義	26.6	143	
能力主義	能力別指向・貧者蔑視	69.7	33	0.0005
能力主義	能力別指向のみ	36.0	25	
能力主義	貧者蔑視のみ	49.6	119	
能力主義	非能力別・貧者同情	34.1	167	
家意識	家本位	59.6	188	0.0000
家意識	どちらともいえない	34.6	81	
家意識	自己本位	10.8	74	
同別居観	長男同居	66.7	24	0.0856
同別居観	息子同居	48.1	52	
同別居観	だれか子が同居	40.5	173	
同別居観	娘が同居	27.8	18	
同別居観	別居	42.7	75	

姓　選　択	夫姓にすべき	52.4	84 •	0.0097
姓　選　択	夫姓がよい	49.2	120	
姓　選　択	どちらの姓でもよい	33.9	115	
姓　選　択	別姓のままがよい	26.1	23	
理想の家族	家父長型	55.8	43 •	0.0002
理想の家族	夫婦自律型	25.3	99	
理想の家族	夫婦分業型	53.6	97	
理想の家族	夫婦協力型	44.2	104	
世間への同調	世間同調被規制型	52.5	179	0.0014
世間への同調	世間同調型	37.8	37	
世間への同調	世間被規制型	36.0	86	
世間への同調	自律型	22.5	40	
政治参加態度	何をしても無駄	62.7	75 •	0.0001
政治参加態度	積極参加	35.1	205	
政治参加態度	かかわりたくない	56.1	41	
政治参加態度	その他	15.8	19	
満　足　度	社会・生活に満足	57.3	140 •	0.0012
満　足　度	社会に不満	38.1	126	
満　足　度	生活に不満	55.3	38	
満　足　度	社会・生活に不満	31.3	96	
高校同和教育	盛　ん	33.0	88 •	0.0554
高校同和教育	ときたま	44.1	136	
高校同和教育	全くなし	49.6	119	
学習体験	人も読書も	18.8	48 •	0.0000
学習体験	読書だけ	34.3	99	
学習体験	人だけ	62.5	16	
学習体験	いずれもなし	52.8	180	
姓　別	男　性	22.9	140 •	0.0097
姓　別	女　性	56.9	202	

• 無回答があるためサンプル数の合計が344になっていない。

なし」は62・5％と異常に多い。どうしてだろうか。「ひと体験」と「結婚忌避態度」との関係は、表4のとおり、「ひと体験」を有するものほど、「結婚忌避」は少ないという予想通りの関係を示している。x^2検定では2％の危険率で有意な差が認められる。しかし、これを「読書体験」と組み合わせると、つまり「読書体験」の「結婚忌避態度」に及ぼす影響をとりのぞくと、上記のような結果になる。これは、このカテゴリーに含まれるのがわずか16ケースとサンプル数が少ないことによる偶然の結果という可能性も高いが、そうではなく、意味ある結果とみると、次のような解釈ができるだろう。この調査の対象者が学生であることを考えれば、「親しい『部落』の人からいろいろ話を聞いたことがある」というのは、友達ないし同級生に「部落出身者」のいたこと、「部落」が身近な存在としてあったことを示すものといえよう。その場合、さまざまな情報がいり混って流れ込み、それらを対象化し、整理する枠組を提供する「読書体験」がなければ、日常生活レベルでの「部落」への真の意味づけが凌駕し、その結果「結婚忌避」の態度を生み出すと解釈できる。「部落出身者」との親しい付き合いそれ自体は、「結婚忌避」の態度を減少せしめない。このことのもつ意味は重要である。「部落」と身近な体験を有するものほど「読書体験」が、すなわち、日常的生活レベルのさまざまな体験や情報を、対象化してとらえた枠組の提供が必要である。

表4　「ひと体験」と「結婚忌避的態度」「部落出身者」との結婚

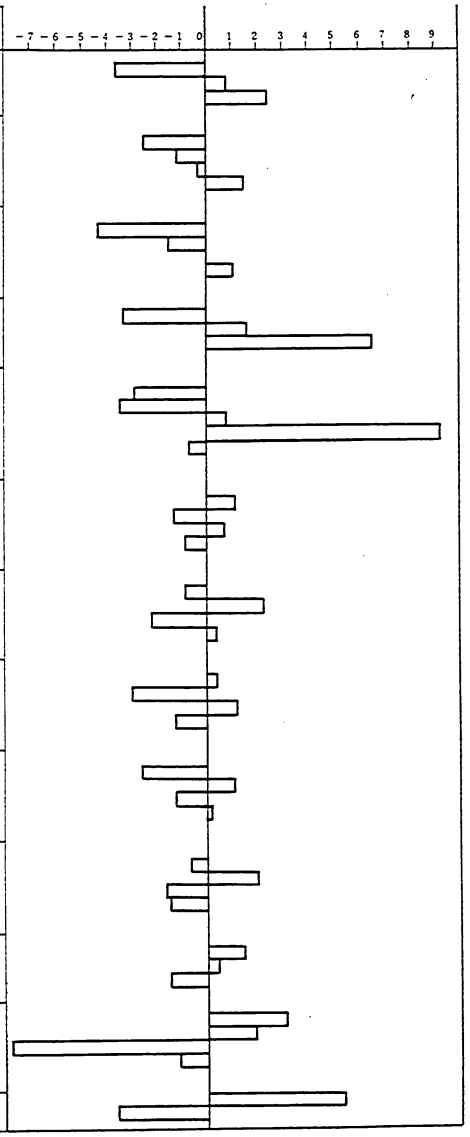
		する	しない	
「部落出身者」から話を聞いた体験	あり	45 (70.3)	19 (29.7)	64 (100.0)
	なし	150 (53.7)	129 (46.2)	148 (100.0)
計		195	148	344

9、数量化Ⅱ類による分析

以上のように、それぞれの要因と「結婚忌避態度」との関係はとらえることができた。しかし、各要因が「結婚忌避態度」に及ぼす影響の強さは、カテゴリー間での比率の差によっておおよそはつかむことができるが、確かなことはわからない。そこで数量化の手法を用いて、影響の強さを各要因間相互で比較検討し、またそれら要因によって「部落出身者」との結婚についての態度がどの程度予測可能かを調べてみた。数量化Ⅱ類による分析結果は表5のとおりである。

表5　数量化Ⅱ類による「結婚忌避態度」の分析

説明変数	カテゴリー	ウェイト (×10⁻¹)	偏相関	順位
権威主義	高	−3.64	0.187	5
	中	0.88		
	低	2.44		
地位関心	尊敬・上昇指向	−2.45	0.120	10
	上昇指向のみ	−1.07		
	尊敬指向のみ	−0.25		
	非尊敬・のんびり指向	1.54		
能力主義	能力別指向・貧者蔑視	−4.34	0.130	8
	能力別指向のみ	−1.50		
	貧者蔑視のみ	0.01		
	非能力別・貧者同情	1.03		
家意識	家本位	−3.32	0.296	2
	どちらともいえない	1.71		
	自己本位	6.47		
同・別居観	長男同居	−2.90	0.215	3
	息子同居	−3.47		
	だれか子が同居	0.79		
	娘同居	9.14		
	別居	−0.66		
姓選択	夫姓にすべき	1.06	0.087	13
	夫姓がよい	−1.26		
	どちらかの姓に	0.72		
	別姓のまま	−0.87		
理想の家族像	家父長型	−0.84	0.137	6
	夫婦自立型	2.19		
	夫婦分業型	−2.24		
	夫婦協力型	0.34		
世間への同調	世間同調・被規制型	0.31	0.100	11
	世間同調型	−2.96		
	世間被規制型	1.21		
	自立型	−1.22		
政府参加態度	何をしても無駄	−2.56	0.123	9
	積極的参加	1.15		
	かかわりたくない	−1.16		
	その他	0.15		
満足度	社会・生活に満足	−0.61	0.131	7
	社会に不満	2.01		
	生活に不満	−1.54		
	社会・生活に不満	−1.48		
学校の同和教育の頻度	盛ん	1.48	0.099	12
	ときたま	0.40		
	全くなし	−1.54		
学習体験	人も読書も	3.06	0.192	4
	読書だけ	1.79		
	人だけ	−7.79		
	いずれもなし	−1.10		
性別	男性	5.39	0.334	1
	女性	−3.70		



グループ	平均得点	標準偏差	相関比
「結婚する」	5.65×10^{-1}	0.810	0.650
「結婚しない」	-7.48×10^{-1}	0.688	

予測の精度、すなわち上記13要因、48カテゴリーに対する回答パターンによって「結婚忌避」グループに属するか、もしくは「結婚する」グループに属するかを判別する精度は、相関比によって示される。1に近い値ほど、2つのグループに与えられた数値が隔っており、どちらのグループに属するかが高い確率で予測できるのである。この場合は0・650で、高いとはいえないまでも、まずまずの相関比を示している。図1は、それぞれのケースに与えられた得点の分布を示している。マイナス0.4から0.4の値をもつケースは、どちらのグループに属するかを判別するのは難しいが、それより上位もしくは下位の得点のケースは、かなりの確率で予測できることがわかる。

次に、それぞれの要因、カテゴリーがグループの判別にどの程度寄与しているかをみてみよう。寄与の程度は、表4のカテゴリー・ウェイトもしくは偏相関係数によって示される。カテゴリー・ウェイトの符号は、表4の下欄に示した、グループ別の得点の符号に対応しているから、マイナスの値をもつカテゴリーは、「結婚忌避」グループの特徴を示している。このカテゴリー・ウェイトのレンジが大きいほど、グループの判別に寄与している。

今、他の要因の影響を除去した偏相関係数によって、寄与の大きいものから順位をつけた。

第一の要因は性別である。女性は男性と対照的に「部落出身者」との結婚を忌避する傾向がある。今日の社会状況の中で女性であることによって作られた一つの社会的態度がこのような結果をもたらしているのである。今日の学生の中に少なからず次のような意見がみられる。「部落差別はいけないことです。しかし、もし私が『部落』の人と結婚したいといえば、親はきっと反対するだろう。親の反対を押し切ってまで結婚する自信はないし、結局あきらめてしまうだろう。そんな弱い自分が恥ずかしいが、部落問題には理解をもちつづけ、自分の子の時は、そんことで反対する親にはなりたくない」、この意見は、男性より女性に多くみられる。自らの判断と意志で自分の生活を引き受けるのを躊躇し、親の意向に従順な態度を、性別という属性が間接的にとらえているとみてよい。[12] このような社会的態度は、女性というある意味で被差別的状況によって生み出された態度である。

第二に大きな影響力をもつのは「家意識」である。第三は「同別居観」である。いずれも、伝統的家族観に関連した意識である。「結婚相手を決めるときは、自分本位ではなく家のことも考えて決めた方がよい」という意見に反対するものが、「結婚する」グループになるのは、当然であるが、「息子より娘と同居した方がよい」とする意見が、

図1．ケースごとの得点分布

「別居した方がよい」とする意見よりも大きく、「結婚する」グループに寄与している点は興味深い。

他方、伝統的家族観に関連する「姓選択」は、13の要因の中では、最も影響力をもたない。しかし「理想の家族像」は、第六番目と、まずまずの影響力をもっている。このようにみると、「結婚忌避態度」に伝統的家族観が、中でも親との関係性を問う要因が、大きな影響を及ぼしていることがわかる。こうした点で家族への同調性が「結婚忌避態度」を規定しているとみてよい。

第四の要因は「学習体験」である。「ひと体験も読書体験」もあるものは、「結婚する」グループを形成するのに対して、「読書体験がなく、ひと体験のみ」は「結婚忌避」グループ形成に大きく寄与している。この点については、すでに述べた通りである。またこれを、「高校の同和教育」（第十二番目）と比べると、その影響力の大きさがわかる。しかし、この「高校の同和教育」の影響力の小さは、その内容の問題というよりは、ここでの質問項目のまずさによるものとみた方がよい。

第五の要因は、「権威主義」である。クロス集計の分析からは、最も大きな影響力をもつ要因とみられたが、この数量化Ⅱ類内分析によれば、それほど大きな影響力をもっていない。とはいっても「権威主義」と「結婚忌避的態度」との結びつきのもつ意味は、無視できない。また「能力主義」は第八番目の要因となっている。ことに能力別学級編成を支持し、かつ貧しい人々を蔑視するタイプは、「結婚忌避」グループを形成する度合が強いことは注目される。

第七番目の要因は「満足度」である。自己の生活に満足している一方で、社会に対しては不満をもつものは、「結婚する」グループを形成するのに対して、社会に対する満足度がどうであれ、自己の生活に不満をもつタイプが「結婚忌避」グループを形成しやすいという結果は興味深い。もっとも満足度が差別意識の結合する過程は単純ではなく、さきに述べたブレロックの「地位喪失」の仮説からは、自己の生活に満足するものほど、「結婚忌避」態度をとりやすいという仮説が演繹されるが、他方、フラストレーション仮説からは不満をいだくものほど、被差別者集団へ攻撃的態度をとるという、まったく正反対の予測が成り立つ。このように、満足度と差別意識との関係は、不満の対象、不満の深さ、不満足の解消の方法、地位喪失への危機感など媒介変数を導入しなければ、明確にとらえることはできない。今後の検討課題である。

上記の満足度の組み合わせパターンは、保守的態度、革新的態度に近いものである。そこでこれに近い「政治参加

態度」をみると、第九番目の要因となっている。「我々が少々騒いだところで、政治はよくなるものではない」とか「政治のようなわずらわしいことにはできるだけかかわりたくない」といった意見をもつものが「結婚忌避」グループになる傾向は、満足度パターンと一致している。

「地位関心」（第十番目）や「世間への同調」（第十一番目）は、予想されたほど大きな影響を与えていない。これは、質問項目のまずさによるのかも知れない。

一〇、おわりに

以上のように、「部落出身者」との結婚忌避の態度は、直接部落に対する態度を聞かなくても、かなりの確率で予測することは可能である。このことは、逆に、「結婚忌避態度」、差別意識は、さまざまな社会的態度・価値観によって支えられていることを意味し、差別意識を吸収、維持しやすい社会的態度・価値観の一種のネット・ワークが存在していることを暗示している。実践的には、部落に対する差別意識の本体をたたくことはもちろんのこととして、それを支える社会的態度、価値観の変革もまた重要な課題であることを示している。

この調査では、差別意識の存立基盤を解明するために、ほんのわずかな切り込みを加えただけである。ここでとりあげた13の要因以外にも重要な要因がぬけおちている。また数量化Ⅱ類による分析もあくまで、13の要因の中での相対的位置をみたものであり、その判別力の順位も、質問項目の巧拙に依存しているから、ここでの結果を一般化することは危険である。各要因を測定する質問項目を精錬するとともに、差別意識の存立構造解明のための関連要因の概念の精緻化も、今後の課題として残されている。

（大阪教育大学助教授）

注

(1) この調査については、拙稿「属性別にみた大学生の部落問題についての意識」『部落解放研究』第17号、一九七九年を参照。また同和教育の効果測定という観点から分析したものに、拙稿「意識調査からみた同和教育の留意点」中野陸夫編『教科教育における人間解放の理論と展開』第一法規、一九八〇年がある。

(2) 大安吉日やひのえうまなど「風習」への同調と「同和問題とのかかわり」との関係は、『大阪府民の同和問題についての意識調査』一九八〇年など山本登氏の設計による調査で検討されている。「しきたり重視」・「利己的」・「あきらめ志向」の三つの社会的態度と「同和問題への姿勢」との関係については、磯村英一氏グループによる『京都市同和問題意識調査報告書』一九八二年で、検討されている。

(3) G・W・オルポート『偏見の心理』一九五四年（原谷達夫、野村昭訳、一九六八年）
A・メンミ『差別の構造』一九六八年（白井成雄、菊地昌実訳、一九七一年）

(4) 野口道彦「部落の現状をとらえる認識の枠組」『解放教育』№一四二、一九八一年一一月号

(5) Ackerman, N. W & M. Jahoda. Anti-Semitism and Emotional Disorder, 1950年.
Simpson, G. E & J. M. Yinger, Racial and Cultural Minorities,
4th ed. 1972年.

(6) Bogardus, E. S. Measuring Social Distance, Journal of Applied Sociology, №. 9. 1925年.
Westie, F. R. A Technique for the Measurement of Race Attitudes ASR vol. 18. 1953.

(7) 親や世間の態度は、この場合客観的事実というよりは、対象者によって認識されたことがらである。これは自らの態度を正当化するためにいくぶん歪曲されていることが多い。

(8) T・Wアドルノ編『権威主義的パースナリティ』一九五〇年（田中義久他訳、一九八〇年）

(9) 部落解放同盟兵庫県連編『あらためて山田久部落差別糾弾闘争の持つ意義を明らかにする』一九七五年

(10) Kaufman, W. C. Status, Authoritariarism and Anti-Semitism, AJS, vol. 62. 1957年.

(11) Blalock, H.M. Jr. Toward a Theory of Minority-Group Relations, 1967年.

(12) この調査の場合、女性の大半が短大生によって占められている。このサンプル特性が影響を及ぼしている可能性も考えられる。

＊ データの分析は、京都大学大型計算機センターを利用して行った。

補注

質問A あなたは、「結婚相手を決めるときは、自分本位ではなく、家のことも考えて決めた方がよい」という意見についてどう思いますか？

□1、全く賛成 □2、まあ賛成 □3、どちらともいえない
□4、まあ反対 □5、全く反対

質問B 同居、別居についていろいろな考え方がありますが、一般的にいってあなたは次の意見のうちどれに近いですか？

□1、長男が親と同居した方がよい。
□2、長男、二・三男の別なく息子のうちだれかが親と同居した方がよい。
□3、息子、娘を問わず、子どものうちだれかが親と同居した方がよい。
□4、息子より娘が、親と同居した方がよい。
□5、親夫婦と子夫婦は別居した方がよい。

質問C あなたは次のどの家庭が最も望ましいと思いますか？

□1、父親は一家の主人として威厳をもち、母親は父親をもりたてて心から尽している。

□2、父親も母親も、自分の仕事か趣味をもち、それぞれ熱心に打ち込んでいる。

□3、父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された家庭をしっかりと守っている。

□4、父親はなにくれとなく家庭のことにも気をつかい、母親も暖かい家庭づくりに専念している。

質問D 一般に結婚した男女は、姓（名字）をどのようにしたらよいと考えますか？

（養子の場合をのぞく）

□1、当然妻が、姓を改めて、夫の姓を名のった方がよい。

□2、現状では、妻が姓を改めて、夫の姓を名のった方がよい。

□3、夫婦は同じ姓を名のるべきだが、どちらかが姓を改めたらよい。

□4、わざわざ一方に合せる必要はなく、夫と妻は別々の姓のままでよい。

質問E あなたは何かをするとき世間の目を気にする方ですか、それとも……

□1、かなり気にする方。 □2少しは気にする方。

□3、あまり気にならない方。 □4、まったく気にしない方。

質問F 町内会が中心となって集めている寄付に対して不満があった場合、ハッキリと断わりますか、それとも多少の不満があってもつきあいが大切だから寄付に応じますか？

□1、寄付を断わる。 □2、寄付に応じる。

質問G 次のような意見があります。それぞれについてあなたはどのように思われますか？あてはまる□内に✓印をつけてください。

A、困ったことで苦しいことがある時は、何も考えないで、愉快なことに熱中するのが、一番だ。……

1、全く賛成 □← 2、やや賛成 □← 3、どちらともいえない □← 4、やや反対 □← 5、全く反対 □←

B、現代の社会の混乱を救うには、強力な政治家があらわれて、国民をひっぱっていかなければダメだ。……

□1 □2 □3 □4 □5

C、性犯罪をなくすには、刑罰をもっと重くすればよい。……

□1 □2 □3 □4 □5

D、人の一生は生れたときにすでに運命で決められており、ただその人が知らないだけだ。……

□1 □2 □3 □4 □5

E、目上の人を尊敬し、目上の人の意見に耳を傾けるように、子どもをしつけるのは大切なことだ。……

□1 □2 □3 □4 □5

F、人間は生れつき能力にちがいがあるのだから、能力のある者は、ない者の上に立ってあたりまえだ。……

□1 □2 □3 □4 □5

G、たとえ自分が正しくないと思っても、皆がすることなら、それに従っていた方が無難だ。……

□1 □2 □3 □4 □5

H、戦争やあらそいは、人間の本能に根ざしたものだから、たとえ社会が変っても、この世からなくならない。……

□1 □2 □3 □4 □5

I、最近の人々は文句ばかりいっているが、黙って自分の仕事にはげんでいれば、世の中は自然とうまくいく。……

□1 □2 □3 □4 □5

質問H あなたもしくはあなたの将来の配偶者が、仕事の上で成功し、人々から尊敬されることは、人生の重要な目標と思いますか？

□1、大変重要。 □2、かなり重要。

□3、あまり重要でない。 □4、まったく重要でない。

質問I 人の生き方はさまざまですが、あなたは次の甲、乙の生き方のうちどちらに共感しますか？

□1、甲：チャンスがあればのがさず一所懸命努力し、より高い地位を求めていく生き方。

□2、乙：あくせく働いて高い地位を求めようとせず、のんびりとマイウェイを楽しむ生き方。

質問J 学校教育について、次の甲、乙の意見があります。あなたの考えはどちらに近いですか？

□1、甲：子どもの能力を十分伸すためには、義務教育から能力別に学級を編成した方がよい。

□2、乙：能力別学級編成は、子ども同士を対立競争させ、結局はなもちならないエリートをつくるだけだ。

質問K 貧しい人について次の甲、乙の意見があります。あなたの考えはどちらに近いですか？

□1、甲：生活が貧しいのは、努力や能力が足りないからだ。

□2、乙：貧しい人は、たいてい正直で損をした善人なのだ。

質問L あなたは、次の点でどの程度満足していますか？

A、社会全体に対して……

1 大変満足 □← 2 まあ満足 □← 3 どちらともいえない □← 4 少し不満 □← 5 大変不満 □←

B、あなた自身の生活全般について……

□ □ □ □ □

質問M 国の政治について、あなたの態度は次のどれにあてはまりますか？

□1、われわれが少々騒いだところで、政治はよくなるもの

でない。

□2、国の政治はいっぺんに変るものではないが、われわれが努力すれば、少しは効目があるのだから、運動や組織を通じて、われわれの意見を政治に反映させなければならない。

□3、今の生活にまあまあ満足しているから、政治のようなわずらわしいことにはできるだけかかわりたくない。

□4、その他（具体的に　　）

質問N　最近、学校では、「同和教育」（「部落問題」や「部落差別」についての教育）がとりくまれていますが、あなたの高校の場合、どうでしたでしょうか？

□1、大変さかんにとりにくまれていた。

□2、かなりさかんにとりくまれていた。

□3、ときたまとりくまれていた。

□4、まったくとりくまれていなかった。

質問O　ところであなた自身は「部落問題」とか「部落差別」の現実をみたり体験されたり、またこのことを勉強されたことがありますか？

イ、親しい「部落」の人から、いろいろ話をきいた。……

はい　いいえ

□1　□2

ロ、「部落問題」に関する本を読んで勉強した。……

□1　□2